

経済学^{における}理論・歴史・政策

金子ハルオ・鶴田満彦 編
小野英祐・二瓶剛男

横山正彦先生還暦記念



有 斐 閣



経済学における理論・歴史・政策

昭和53年11月15日 初版第1刷印刷
昭和53年11月25日 初版第1刷発行

定価 ¥6,000

	金子ハルオ
編者	鶴田満彦
	小野英祐
	二瓶剛男
発行者	江草忠允

東京都千代田区神田神保町2~17

発行所 株式会社 有斐閣

電話 東京 (264) 1311 (大代表)
郵便番号 [101] 振替口座東京 6-370 番
本郷支店 [113] 文京区東京大学正門前
京都支店 [606] 左京区田中門前町44

印刷・株式会社精興社 製本・牧製本印刷株式会社

© 1978. 金子ハルオ・鶴田満彦・小野英祐・二瓶剛男

Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

3033-063470-8611

はしがき

横山正彦先生は、昨年（一九七七年）四月めでたく還暦を迎えられ、また本年四月をもって東京大学経済学部を停年退職され、五月に東京大学より名誉教授の称号を授与された。

東京大学の学部および大学院における横山正彦先生の演習に参加して先生のご指導を受けた演習生一同は、先生のご還暦を祝い永年にわたる学恩に謝意を表するために、種々の催しを行ってきたが、なかでも学者としての先生を記念するに最もふさわしい企てとして、演習生のなかで大学の教職に就いてそれぞれ専門の研究に従っている者たちによる記念論文集の作成を計画し、進めてきた結果、ここによりやく本書『経済学における理論・歴史・政策——横山正彦先生還暦記念——』を、先生と縁の深い有斐閣より刊行する運びとなった。

横山正彦先生は、少年の折りに昭和初期の大恐慌に襲われた郷里南信州の農村の人びとの窮乏を深く心に焼き付けられ、まさしく「経世済民」の学を求めて上京され、一九四一年東京帝国大学経済学部経済学科を卒業された。そして、卒業後数年間の「暗い谷間」の時代には、東京銀行集会所および全国金融統制会に勤務され、地道に調査・研究に当たられた。日本帝国主義の敗戦の翌年、一九四六年には、先生はその豊かな学才を嘱望されて母校東京帝国大学経済学部を迎えられ、一九五五年には教授に昇任、経済政策第一講座を担当され、停年に至るまでの三二年間東京大学経済学部勤務された。この間に、先生は、学部および大学院において多くの学生の教育と指導に尽力されとともに、経済学博士の学位を授与された学位論文『重農

主義分析』を初めとする多くの輝かしい研究成果を世に問われた。

横山正彦先生は、このように永年経済学の研究と教育に大きな足跡を残してこられたが、その先生の活動を支え、貫いてきたものは、科学的社会主義の理念である。先生は、わが国の社会と大学とアカデミズムの複雑で困難な状況のなかで、正統なマルクス主義経済学の立場を文字どおり堅持され、マルクス主義経済学の科学性と革命性についてゆるぎない確信を終始表明されてきた。それがいかに多くの難儀を伴うことであるかは、大学とアカデミズムのなかに身を置いている者にとっては痛感されることである。先生は、その「荆の道」を節を曲げずひたすらに歩んでこられた数少い学者の一人なのである。そうして、先生が抱き続けてこられたこの理念と確信は、書斎での単なる思弁によって得られたものでは決してなく、それは、若き日に資本主義経済制度の不合理、国民の窮乏と戦争を目の当たりにされた生活体験のなかで培われ、現存の社会を貧困と戦争のない社会に変革しようとする燃えるような熱情によって支えられ、社会の変革に科学的指針を与えるための冷徹な思考と学理の探究をとおして磨かれたものであった。私たち演習生一同は、先生の人間的包容力の広さに応じてさまざまな信条と個性の持主からなるが、誰しもが親しく先生の警咳に接するなかで、先生の学問上の理念と確信が、先生のまことに公正無私の高潔な人格と一体のものであることを知り、そこに先生の人間的魅力を見いだし、それぞれに人格的な感化を被ってきたのである。

横山正彦先生の研究業績は、経済理論、経済学史、経済政策という経済学の三つの主要な分野にわたっている。先生は、経済理論の分野においては、マルクス主義経済学は、科学的社会主義の核心部分であり、唯物史観を「導きの糸」としていること、したがって、それは、「一つの静態的なシステムの論理」にとどまるものであってはならず、資本主義経済が「自分自身の内部からの起動力によって推し進められ、変化して

いく、そういった経済的バタンの現実の連鎖あるいは系列——歴史的発展——についての分析」でなくてはならないことを強調されている。また、経済学史の分野においては、「一定の経済理論の成立・発展は、その国その時代の社会的経済的情勢に根ざし、必ずやそれと一定の連関を持っている」ことを強調され、すべての経済理論の本質とその発展過程は、それらが生み出された「歴史的背景ないし環境」の吟味をおして解明されるべきであり、このような研究方法によって初めて経済学史は「一個の独立科学」として成立し得ると主張されている。さらに、経済政策の分野においては、経済理論と経済政策との関連の綿密な検討によって、経済政策論の重要な課題は、経済理論を意識的に応用し、それを経済政策に実践的に適用することの妥当性如何の検討にあるという結論を導き出されている。

このように先生の研究が経済学の三つの主要な分野にわたり、独自の見解と学風を持っていることを反映して、本書の執筆者の専門と執筆論文も、おのずから経済学の三つの主要な分野にまたがることとなった。そこで、本書では、論文を、Ⅰ 経済理論、Ⅱ 経済学の歴史、Ⅲ 経済政策の三つに大別して、論理的な、または歴史的な順序を考慮した配列をとり、本書の表題もそのことを示すものとした。本書の論文は、それぞれ執筆者の責任において各自の最近の研究成果として発表されたものであって、編者は形式上の統一を計る以外に手を加えなかったが、しかし、各論文は多少とも等しく先生の学風の影響を受けている点でおのずから有機的に脈絡を保ったものとなっている。

ここに、編者は、執筆者一同とともに、横山正彦先生のご還暦を祝い、先生の学恩にたいする心からの感謝を込めて、先生に本書を献じ、先生が丹精をこめて蒔かれた学問の種が門下生のなかにいかに多様に芽生えているかを見ていただきたいと思うとともに、本書がわが国の経済学の研究水準を一步でも高めることを

ひそかに念じている。

横山正彦先生は、青年時代より頑固な持病をはじめ幾つかの病を背負われて、その優れた才能を担う肉体は残念ながらご丈夫とは言えない。先生は、『資本論』を書いたマルクスと同じように、教育と研究上の輝かしい業績を病苦と闘いながら仕上げられたのである。それは、先生ご自身の病にたいする科学的な認識と病を克服するための驚くべき忍耐の賜物であるとともに、なによりも昌子夫人の先生への献身の賜物でもある。ご夫妻のご努力によって、幸い、現在は、先生は最近の脚のお怪我も快方に向かわれて体調も比較的良好とお見受けする。先生には、どうか今後とも健康にくれぐれも留意されて、先生の精神と肉体の支えである昌子夫人ともども長寿を保たれ、なおいつその学問的成果を積まれるよう祈ってやまない。

最後に、本書の刊行にあたっては、有斐閣の涌井義治氏に一方ならぬお世話になった。編者として心からお礼を申し上げる。

一九七八年一〇月

編集委員

金子ハルオ

小野 英祐

鶴田 満彦

二瓶 剛男

■執筆者（執筆順）

金子ハルオ（かねこ はるお）	東京都立大学経済学部教授
鶴田 満彦（つるた みつひこ）	中央大学商学部教授
小林 賢齊（こばやし まさなり）	武蔵大学経済学部教授
二瓶 剛男（にへい たけお）	東京大学社会科学研究所助教授
玉垣 良典（たまがき よしのり）	専修大学経済学部教授
小野 英祐（おの えいすけ）	東京大学経済学部教授
高山 満（たかやま みつる）	東京経済大学経済学部教授
久留島陽三（くるしま ようぞう）	岡山大学法経学部教授
遠藤 潔（えんどう きよし）	独協大学経済学部教授
吉原 泰助（よしはら たいすけ）	福島大学経済学部教授
高島 光郎（たかしま みつろう）	横浜国立大学経済学部教授
永安 幸正（ながやす ゆきまさ）	早稲田大学社会科学部助教授
加藤 栄一（かとう えいいち）	東京大学社会科学研究所教授
岡本 友孝（おかもと ともたか）	東北大学教養部助教授
杉浦 克己（すぎうら かつみ）	東京大学教養学部助教授
島岡 光一（しまおか こういち）	埼玉大学教育学部助教授
西川 純子（にしかわ じゅんこ）	東京都立商科短期大学教授

目次

はしがき

I 経 済 理 論

サービスの概念と基本性格 金子ハルオ…一

マルクス市場価値論の一考察 鶴田満彦…三

社会的総資本の再生産＝流通過程に「内在する矛盾」について 小林賢齊…五

——一つの覚え書——

マルクス再生産表式と社会主義再生産過程 二瓶剛男…七

——マルクス・レーニンの指摘についての覚え書——

商品の過剰と資本の過剰 玉垣良典…一〇

——戦後恐慌論研究の批判的総括のために——

商業手形における期限と金額 小野英祐…一五

「金融資本」分析と価値法則……………高山 満…三

——「金融資本」体制の構造分析か、「独占化」Ⅱ「過渡期」Ⅱ「移行期」の「理論」か

現代価格理論の一考察……………久留島陽三…二五

ケインズ『貨幣論』の『一般理論』への転形の理論構造と

その「現実的前提」……………遠藤 潔…七一

II 経済学の歴史

マルクスとケネー「経済表」……………吉原泰助…三五

J・S・ミルと土地保有改革協会……………高島光郎…五五

——その綱領の成立過程を中心として——

価値と分配の理論における古典学派的伝統の復興と新展開……………永安幸正…七七

——スラッフア体系をめぐる——

III 経済政策

自由主義国家論ノート……………加藤栄一…二九五

国家独占資本主義と「冷い社会化」……………岡本友孝…三五

——地方財政金融均^{ダイレクショナルウェン}制^化をめぐる運動——

現代資本主義の政治権力	杉浦克己
——アメリカを中心とする問題提起——	
戦後「新鋭」重化学工業と地域経済論	島岡光一
一九二〇年代アメリカの産業構造	西川純子
——固定資本の量的分析を中心に——	

サービスの概念と基本性格

金子 ハルオ

一 拙著の批判者Ⅱ「サービス価値生産論者」とその特徴

生産的労働論についての私の年来の研究の成果である拙著『生産的労働と国民所得』が刊行されてからすでに約一〇年を経たが、この間に、赤堀邦雄氏著『価値論と生産的労働』、飯盛信男氏著『生産的労働の理論』などの拙著の根本的批判をふくんだ著作があらわれ、それに同調する人びとも少なくない。

これらの拙著の批判者は、私を「代表的人物」とする「現代マルクス経済学者」が、(1)物質的財貨である商品に対象化された労働だけが価値を生むのであり、(2)したがって、サービス労働は資本のもとでおこなわれる場合でも、価値も剰余価値も生産せず、(3)サービス部門の労働者と資本家の所得は、物質的生産部門で生産された価値生産物である「本源の所得」から再分配される「派生的所得」である、としている見解Ⅱ「通説」にたいして「真向から反対である」といわれる。そうして、(1)サービス労働は、それがそのままの姿で商品であり、「社会的全体的労働の一部」と

いう性格をもつかぎり、流動状態のままで価値を生むのであり、(2)したがって、資本のもとでおこなわれるサービス労働は、価値と剰余価値を生産し、(3)サービス部門の労働者と資本家の所得は、物質的生産部門で生産された「本源的所得」から再分配された「派生的所得」ではなく、サービス部門自体で生産された「本源的所得」である、という見解をくりかえし述べているのである。このような次第で、赤堀氏をはじめとする拙著の批判者によれば、私を代表者とする「通説」の誤りは、要するに「物に対象化しない流動状態の労働は価値を生まない」という「物神崇拜の価値論」によって「サービス労働は価値を生産しないと頭からきめてかかっている」点に根ざしているものであり、そこから拙著も『資本論』や『剰余価値学説史』におけるサービスにかんするマルクスの叙述について誤解を重ねることになったといふのである⁽¹⁾。

ところで、このような「サービス価値生産論者」といふべき拙著の批判者の見解は、サービス部門も物質的生産部門とおなじく社会の生産部門の一つであって国民所得を生産するとみなす点で、近代経済学者の主流の見解と軌を一にしている。ただし、近代経済学者が、ここにいう「通説」をマルクス自身の見解と基本的には同一のものとして、そもそもマルクス自身の見解を誤りとするのになんてして、「サービス価値生産論者」は、ここにいう「通説」をマルクス自身の見解と基本的には異なるものとして、マルクス自身の見解は正しいのに、「通説」はそれに反しているゆえに誤りとする。つまり、「サービス価値生産論者」の論議の特徴は、自分たちの見解こそ科学的に正しいマルクス自身の見解と同じものであり、自分たちこそマルクスの労働価値説を正しく理解し、継承している真のマルクス経済学者であるのになんてして、「通説」は科学的に正しいマルクス自身の見解に反するものであり、「通説」の主張者たちはマルクスの労働価値説を誤解し、台なしにしてしまった「現代マルクス経済学者」である、という仕方⁽²⁾で論議することにある。

ここにいう「通説」の「代表的人物」とされた私は、こういう特徴をもつ批判者の諸著作を虚心に読んでみたが、

それらの諸著作の理論的核心である資本主義のもとでは「サービスも価値を生む」という見解はやはり納得できないし、さらにマルクス自身がそういう見解をとっていたという主張はとうてい承認できない。私は、いぜんとして、「サービスは価値を生まない」というのがマルクス自身の見解であつたし、それはまたマルクスによってうちたてられた経済学の方法と理論にそつた科学的に正しい見解であり、マルクス自身がそれを否定したことなどはないと考えるをえないのである。したがつて、私からみれば、たしかにサービスが価値を生むとみるか生まないとみるかは「見解の自由」であるとしても、「サービス価値生産論者」は、ほんらい自分の見解をマルクス自身の見解を批判し、根本的に修正するという仕方で提示するべきであつたのである。

そこで、私は、マルクスの叙述をすべていわゆる「金科玉条とする」というつもりも必要もないと思うが、以下では、まずマルクス自身とマルクス経済学はいかにして「サービスは価値を生まない」という見解をとっているのかを明らかにし、つぎに「サービス価値生産論者」が自分の見解の論拠としているマルクスの叙述がどれも「サービスが価値を生む」ことの論証にはならないことを明らかにするという仕方をとつて、拙著の批判者への反批判を述べることにしたい。

(1) 以上については、とくに、赤堀邦雄『価値論と生産的労働』三一書房、一九七一年、第四章と第五章、および、飯盛信男『生産的労働の理論』青木書店、一九七七年、第三章を参照。

二 マルクスにおけるサービスの把握

まず、マルクスおよびマルクス経済学においては、サービスの概念と基本性格はいかに把握されるべきかについて、本稿の紙数はきわめて限られているので、なるべく原典の引用は避けて、簡潔に示しておこう。

(1) サービスの概念

マルクスにおいては、サービス (service, Dienst) の概念は、基本的にはつぎの二つの異なった意味でもちいられている。

第一の意味では、サービスとは、資本によって雇用される賃労働と対立する意味での、所得によって雇用される賃労働のことである。この意味でのサービスを、私は本来のサービスという。本来のサービスは、たとえば、召使、女中、おかえ運転手などが提供する労働である。本来のサービスは、たとえば召使が雇い主のために物置をつくったり、理髪をしたりするように、ある物質的財貨の使用価値を生み出すこともあれば、生みださないこともある。しかし、そのことは、本来のサービスの概念にはなんの関係もない。本来のサービスは、いずれにしても、雇い主の所得の個人的消費を意味するだけであって、雇い主になんらの利潤をもたらない。つまり、本来のサービスは、資本主義的形態規定の視点からとらえられた不生産的労働のことである。

ところで、いかなる社会においても、労働は、その質料的内容からみれば、自然を対象とし自然に働きかけ物質的財貨を生産する労働とそうでない労働とに二大別される。前者は本源的规定の視点からとらえられた生産的労働であり、後者は不生産的労働である。商品生産のもとでは、後者はまた、(1)商業や金融業などのいわゆる「純粋な流通過程」にたずさわる労働と、(2)直接に人間に働きかけ、直接にその消費者である人間の欲望を充足させる労働とに区別される。

第二の意味では、サービスとは、このように、物質的財貨の生産過程にたずさわる労働と対立し、「純粋な流通過程」にたずさわる労働と区別される意味での、直接に人間を対象とし、直接に人間に働きかけ、したがって物質的財貨を生産することをおしてではなく直接に人間の欲望を充足させる労働のことである。この意味でのサービスを、私はいわゆるサービスという。いわゆるサービスは、たとえば、教師、医師、看護婦、俳優、歌手、演奏者、ホテル従業者などの労働である。いわゆるサービスは、サービス労働者を雇用して使用するサービス資本家によって提供さ

れることもあれば、個人のサービス業者によって提供されることもある。しかし、そのことは、いわゆるサービスの概念にはなんの関係もない。いわゆるサービスは、いづれにしても、それ自体が商品としてある価格をもって売られるかぎり、その対価を購買者である消費者の所得から支払われる。いわゆるサービスの一つの特殊な種類は、資本主義国家の機構と機能の担い手であるという意味での「不生産的階級」である公務員、軍人、警察官などの労働である。このような国家によって提供されるサービスは、個人的に欲すると欲しないにかかわらず国民に押しつけられる「強制的サービス」であり、それは、国民所得から支払われた租税である国家収入によって維持される。

ところで、ここで注意しておくべきことは、サービスという言葉が、一般に、感性的にとらえうる物的生産物を生みださない労働という意味にもちいられることがあり、そこから建築設計などの生産技術の提供、運輸業、保管業、（さらには電力業から商業、金融業までも）がサービス部門に属するとされることがあるが、それは科学的なサービスの概念ではないということである。後述の「典故二」でも述べられているように、物質的財貨を生産する労働とは、直接的に物的対象物に手を下して直接に物的生産物を生みだす労働を意味しているのではない。それは、一定の協業および社会的分業の発達している社会においては、社会の総労働のうちの、ほんらい「人間と自然との質料変換」の過程である物質的財貨の社会的生産過程にたずさわる労働を意味しているのである。それゆえ、物質的財貨を生産する協業労働の一環をなしている技師の労働、および多少とも発達した社会的生産過程の不可欠の一環をなしている運輸や保管の労働は、直接に労働対象を加工し直接に物的生産物を生みださないとはいえず、しかも後者は技術上流通過程と不可分に結びついているとはいえず、物質的財貨を生産する労働であり、したがって物質的財貨に対象化される労働なのであって、けっしてサービスではない。それゆえ、「サービス価値生産論者」が、運輸業、保管業もサービス部門に属するとし、「運輸サービス」、「保管サービス」という規定をもちいているのは、サービス概念の誤用または濫用である。

(1) たとえば、赤堀邦雄『価値論と生産的労働』第六章、および、飯盛信男『生産的労働の理論』第四章を参照。

(2) サービスの基本性格

マルクスは、サービスの概念を、基本的には、以上に述べたように本来のサービスといわゆるサービスとの二つの異なった意味でもちいていることを、私は、かつて拙著のなかではじめて明確にした⁽¹⁾。ところで、拙著の批判者も、サービスの概念の二つの異なった意味をかならずしも明確にしていけないきらいがあるが、ともかく私のいう本来のサービスは価値を生まないとされており、その点について見解の対立はない。たがいの見解が対立するのは、資本主義社会におけるいわゆるサービスが価値を生むのか、生まないのかという点についてである。そこで、以下では、もっぱらいわゆるサービス（以下たんにサービスという）をとりあげ、その基本性格を明らかにしたい。

マルクス経済学が、サービスをそれが資本家によって提供されるとしても価値を生まない性格のものであるとするのは、それが、つぎのような史的唯物論（唯物史観）の考えを出発点とし、基礎にしているということに由来する。

地球上の物質的世界は、人間以外の自然という意味での自然と、最高度に発展した生命体として人間以外の自然から区別された人間という自然という意味での人間とからなる。後者の人間そのものを生産するのは、人間自身の生殖活動であるが、それは、他の動物から人間を区別する人間特有の活動ではなく、人間特有の活動である労働ではない。

このように人間の外部に与えられた自然と人間自身の生殖活動の生産物である人間を与件として、人間ははじめから集団をなして、社会をつくって存在する。そうして、社会的人間または人間社会の存在と発展の根本条件をなしているものが、物質的財貨の生産である。「人間は、政治や科学や芸術や宗教等々にたずさわるまえに、まず飲み、食い、住み、着なければならぬ⁽²⁾。」すなわち、どのような社会においても、人間は生活するためにはまず、「直接的な物質的生活資料⁽³⁾」という意味での生活資料をたえず消費しなくてはならず、そのためには生活資料をたえず生産しなくてはならない。そこで、社会のなかでたがいに関係をむすびながら、人間は、あらかじめその成果を観念的に生産しているという意味で目的意識的な活動である労働によって、それゆえにまた労働手段をもちいて、外部の自然に働